

すにっぴいとすなっぴい

今回紹介するのは、ワンダ・カークの古典的な名作『すにっぴいとすなっぴい』です。この絵本は、ある調査によれば、地域におけるおはなし会や文庫において、人気度ナンバーワンに輝くほど良く読まれているものです。僕の妻も、金沢市の南東部にある「あすなろ文庫」という文庫とお話の会としては比較的歴史のある「金沢おはなしの会」という所で活動していますが、やはりこの絵本に対する子どもたちの反応はすばらしいようです。以前 23 号(2000 年秋号「動物が主人公のふたご・三つ子の本」)で、題名と表紙絵は紹介しているのですが、細かい内容はまだだったので、今回一緒に読んでみたいと思います。

「すにっぴいとすなっぴいは、ちいさいふたこののねずみ」です。すにっぴいがメスで、すなっぴいがオスです。ふたりは、「ほしぐさばたけのかたすみのいごこちのいいちいさいうちで、おとうさんねずみとおかあさんねずみといっしょにすんでいました。」そして、日中は二人仲良く、この広いほしぐさばたけで遊びました。二人ともそこが大好きで、楽しいことが色々とできたからです。夜になると、家族団らんです。お母さんは編物をし、お父さんはみんなに『ねずみしんぶん』を読んでくれました。それは、「おおきなひろいせかいのことや、たくさんのおおきなできごとについて」でした。また、ほしぐさばたけに隣接する大きな庭と大きな家についてでした。しかし、二人が一番興味を持ったのは、そのおおきな家の台所にある「おおきいきいろいチーズのことでした!」

さて、二人はこのチーズに憧れます。ふたりともチーズが大好きだったからです。そうしたある日、お母さんの大きな青い毛糸玉で遊んでいると、その毛糸球が転がり落ち、どんとどんと転がっていきまいました(昔話によくあるモチーフです)。二人は、どこまで転がっていくのか後を追い、さらに自分たちでも転がしていきまいました。「さかをあがってまたおりてあがってあがってまたおりて」行っただので、すっかりつかれた二人は、「おおきなはなのかげでからだをよせあつてよこになり、いつのまにかぐつすりねこんで」しまします。ところが、突然がきこそという大きな音がして、毛糸玉は女の子の手につかまれ、持っていかれてしまします。二人は、その後をついていくのですが、さっきと同じように「さかをあがってまたおりてあがってあがってまたおりて」行かなくてはなりません。カークは、この二つの追跡場面を同じ構図の絵で描き、同じような文体で描いています。これは、昔話風の創作の重要な原則です(いい絵本では、この原則がしっかりと守られています)。

二人が行き着いた先は、なんと憧れていた大きな家でした。興味津々の二人が目指した物はなんだったのでしょうか。もちろん、チーズです。お母さんの毛糸玉の事などすっかり忘れて、二人はチーズを探し回りますが、変な物体(椅子、モップ、スタンド)ばかりに出会ってちっとも見つかりません。中でも一番へんてこだったのは、鏡でした。二人は鏡など見たことがありませんから、怖くなって逃げ出さず(いつも言いますが、鏡は「双子もの」に付き物の小道具です)。でも、二人は出口がわからなくなりました。すっかり途方に暮れてしまったとき、すなっぴいがチーズの匂いをかぎつけます。いよいよチーズが食べられる!しかし、そこにはさらに大きな危機が潜んでいました。チーズはネズミ捕りに仕掛けられた餌だったのです。今度こそもう絶体絶命と読者が思ったとき、救いがやってきます(これも物語の常套手段です)。そうです。お父さんが助けに来たのです。お父さんはネズミ捕りというものの危険について二人に教え、三人で家へと帰っていきます。家の前ではお母さんが待っています。すにっぴいとすなっぴいは、ほつとしたのでしょうか泣き出してしましました。

さて、この絵本のよい所は、子どもが主人公の双子ねずみに感情移入しやすいことです。しかも、それは冒険に満ちたお話ですから、ハラハラドキドキとても楽しい感じですが。また、決定的な危機の際にお父さんが助けに来てくれるという、子どもにとってとても安心な結末を迎えます。また、二人は家に帰るとその冒険を一生懸命お母さんに話して聞かせるのです。

すなっぴいとすなっぴいは一緒に眠り、一緒に冒険します。双子の協同作業です。また、お父さんが助け、その後もその冒険について安心して全部お母さんに話すのですから、共同体への信頼感もしっかりとその根幹にあります。最後に、この絵本の終わり方について一言添えておきます。この絵本は、「けっしてけっしてけっしてにんげんのうちやねずみとりにはちかづきません」と約束し、二人はこの約束をきちんと守ったので、「いつまでもいつまでもいつまでもしあわせにくらしましたとき」という終わり方をしています。しかし、わたしたちはこれを言いつけを守るべきという道德命令と取らないほうが良いと思います。これは、昔話の手法における「結末句」、つまり終わりを示す形式表現として軽く捉えたほうが自然です。昔話に典型的な「けっして」を三回繰り返す用法が使われているからです(丁寧にも、それをさらに二回繰り返している)。成長を促す冒険の後、人間は安心してその成長した自分を生きるのです。1931年に作られた創作絵本ですが、昔話の手法を見事に生かした傑作に仕上がっていると思います。読み聞かせてあげてください。あるいは、親子で一緒に読んでください。

ワンダ・ガーク文・絵、わたなべしげお訳『すなっぴいとすなっぴい』岩波書店

『ツインズ』41号(ビネバル出版)から転載・修正